

在し、日本各地に広がり、盛り上がっている。オリンピックにも、こうした市民参加型で、かつ、極めてレベルの高いプロデュースが、これからの時代に望まれるのではないだろうか。

競技も招致活動も、問われるのは チームワークのあり方。

三日目に視察した選手村は、建物自体は新築できないのだが、宿泊場所が相部屋で狭い上にベッドも小さく、試合前の極度の緊張を考えると、選手たちにとって想像以上に過酷な環境であることに驚いた。また警備上の都合で、選手村は北京市街とは断絶された「陸の孤島」になっているということもあり、寝食を共にする各国のアスリートたちがさまざまな形で交流をしているのが印象的だった。オリンピックは参加することには意義があると言われるが、こうした交流を間近で見ると、その意味を肌で感じる事ができた。もし東京で行うとしたら、アスリート間の交流はもとより、競技日程を終了したアスリートと市民が交流できるような選手村を計画したり、プログラムを設けるのも一案だろう。たとえばサッカーにおけるワールドカップの一次キャンプ、二次キャンプのように、選手村を段階的に分けたり、前乗り用の練習拠点を用意したりすることで、アスリートのメンタル面をケアしつつ、市民と交流できる機会を有効に作りたいたいものである。

日本人選手の活躍を振り返ると、野球の「星野ジャパン」や男子サッカーの「反町ジャパン」、男子バレー「植田ジャパン」など、個性の強いリーダーの名を、カリスマのように全面的に冠して臨んだ競技は、残念ながらいずれも成績が振るわなかった。理由はいろいろ考えられるが、たったひとりのカリスマリーダーが

引っ張ることの脆さが露呈した結果ではないだろうか。そういう意味で逆に成功したのが、ソフトボールであり、女子サッカーの「なでしこジャパン」であり、陸上、競泳の男子リレーなのだろう。

また、個人競技であっても、最近では選手だけではなく、コーチはもちろんのこと、練習パートナー、トレーナー、スケジューラーを管理したりするマネージャーなど、優秀なスタッフの存在が重要視され、「チーム○○」と呼ばれる場合もあり、見方によってはチーム競技と言える。さらに故郷や拠点にしている地域とのつながりを積極的に深めることで、選手を支える社会をもチームに巻き込み、結束力を築いている選手もいる。競泳の北島康介選手などは、まさにその好例。大勢の人々を巻き込んだ「チーム」の結束力が勝利へと導いたのだと思う。

すると、石原慎太郎都知事の招致方法には疑問を感じずにはいられない。先ほどのカリスマリーダーの話ではないが、ひとりのリーダーが声高に叫び、引っ張っていかうとするだけでは、多くの市民の共感を得るのは難しい。石原都知事のような排除、非難の論理で人の心を動かすことはできないし、それでは何よりも東京でオリンピックを開催する意義が見えてこない。たしかに現時点では、キャンディデイト・シテイ（開催地候補）の中で東京はトップであり、数字的な面では一次予選をクリアしている。しかしオリンピックの競技と同じくだが、準決勝、決勝と勝ち進み、実力的に拮抗している状態で勝敗を分けるのは、「技術」ではなく「メンタル」や、それを支える「チームワーク」の部分。招致活動でいえばインフラなどではなく、ヴィジョンや意義、そのプロセスである。



すずき・かん/1964年兵庫県生まれ。82年道中・高卒。86年東京大学法学部卒。同年通商産業省(当時)入省、電子政策課統括課長補佐などを歴任した後、99年慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部助教授に転身。2000年、平尾誠二氏(神戸製鋼所)らとNPO法人ISCIX(シックス)を設立。01年参議院議員通常選挙に民主党公認で、東京選挙区から立候補、初当選。05年9月「次の内閣」の文部科学大臣に就任。07年再選。現在、参議院文教科学委員会委員、参議院政治倫理選挙制度委員長などを務める。

事実、北京オリンピックを成功させた中国にしても、ここ数年の首脳部の変わり様には、目を見張るものがある。従来トップダウンで物事を決めていた国が、オリンピックを通して彼らなりの努力をした。今、東京で行っている招致活動自体に、新たな市民主導の盛り上がりが見られないのが現状だ。

さらに言えば、仮に二〇二六年の開催が叶わなかったとしても、そこで諦めずに二〇二〇年、二〇二四年を目指すべきだとも感じている。莫大な招致活動費や広告宣伝費を使う現在の招致スタイルでは、一回の招致に多額の税金を使うため、四年後に再度立候補することが難しくなる。しかし、無駄なコストを削減すれば、何度でもチャレンジは可能だ。広告宣伝費を使わなければ国民世論を喚起できない、という考え方がそもそも間違いで、たとえばウェブ上で皆が議論できる場を設け、市民自らが参加して盛り上げられる土壌を作るといったコストのあまりかからない施策でも、やり方次第では大きな成果を挙げる可能性はある。

率直に言って、現状の石原さんが主役の招致スタイルを続けるなら、今回の当選は難しいだろう。当選を目指すなら、市民主役型への抜本的な発想の転換が必要だ。繰り返しになるが、これからの時代、オリンピックには、もう一度、草の根に立ち返った活動を展開していくことが求められる。そのことを強く意識するべきだし、私も広く訴えていきたい。

【カズキ】